

帰牛原中原遺跡北東地区

1994. 7

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

帰牛原中原遺跡北東地区

1994. 7

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

帰牛原遺跡群の埋蔵文化財発掘調査は昭和45年（1970）より、本地域での農業構造改善事業に始まり、喬木第一小学校及び喬木中学校の建設事業、水道配水池工事等相次ぐ公共事業の実施に伴って、その事前に行われ、貴重な文化財が検出されて来ました。主なものは縄文・弥生時代の住居址をはじめ、土器、石器、銅鑓等でこの多くの遺物は学術上大きな成果を収め、帰牛原遺跡の全容も明らかになって来ました。

今回の調査は帰牛原地区の下水道整備に伴う厚生省のミニティープラント事業が平成4・5年度に実施されることになり浄化センター建設地が埋蔵文化財地域として確認されていたので、工事に先だち発掘調査を実施しました。

現地は中原遺跡の北東端部にあり調査面積は壁土の採取場として利用されていたため限られた小範囲となり検出された遺物は少なかったものの、住居址が発掘されて帰牛原遺跡群全体の集落構成の状態を知る上で重要な手掛りを得ることができました。

調査にあたっては9月初旬の炎暑の厳しさが残る時期に、調査団長としてあられた佐藤魁信先生をはじめ調査員、作業員、地元関係者、役場下水道担当者皆様方にご協力をいただき、成果ある調査が終了出来ましたことに厚くお礼申し上げます。

平成6年7月

喬木村教育長 城 下 圭 一

例　　言

1. 本書は、平成4年度帰牛原浄化センター建設に伴う発掘調査を長野県下伊那郡喬木村教育委員会が実施した報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集は佐藤が担当した。
3. 本書は、昭和45年（1970）以降、平成4年（1992）の22年間に8次にわたる発掘調査・立合調査結果を含めて、帰牛原遺跡群の総合的なまとめをなした。
4. 遺構実測図作成は、佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤が、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
5. 遺物は、喬木歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序	2
例 言	3
目次・挿図目次	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境	8
II 調査 経過	8
(I) 帰牛原遺跡群の今次前の調査	8
(II) 今次調査(第8次)	11
III 調査 結果	12
1. 住居址	12
IV ま と め	16
図 版	21
調査組織	27

挿 図 目 次

第1図帰牛原遺跡群図	6
第2図帰牛原遺跡群地形図及び周辺主要遺跡図	7
第3図帰牛原I号方形周溝墓・帰牛原II号円形周溝墓	9
第4図帰牛原南原方形周溝墓群	9
第5図帰牛原城本屋遺跡遺構図	10
第6図帰牛原十万山地区遺構図	10
第7図帰牛原中原遺跡北東地区遺構分布図	12
第8図帰牛原中原遺跡北東地区1号住居址	13
第9図帰牛原中原遺跡北東地区2号住居址	14
第10図帰牛原中原遺跡北東地区1号住居址出土遺物	15
第11図帰牛原中原遺跡北東地区2号住居址出土遺物	15
第12図帰牛原遺跡群遺構分布図	17

I 環 境

1. 自然的環境

今次調査した中原遺跡は、長野県下伊那郡喬木村3,112-1番地に所在し、帰牛原遺跡群の北東端部にある。

帰牛原の東側の背後には伊那山地の鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)が東の赤石山脈の前山となって、北から南へと並走している。伊那山地の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちらながら段丘面が発達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。

天竜川の西岸一帯西地区に比し、山麓からびる扇状地は狭小で幅員も全体的に狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の田村原・伴野原、喬木村の城原・帰牛原・上平・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚中原と続く中位段丘面の幅は広く、典型的な段丘を形成している。

遺跡のある帰牛原は、東西に近い方向に連なる段丘で、標高490~535mの伊那谷洪積中位段丘に位置づく。北から西側は比高70m前後の段丘崖となり、北の崖下には各々須川が流れ、西は天竜川の氾濫原をのぞみ、南は小川川の支流駿馬沢が流れ、深い谷となり、川との比高35~77mに達し、段丘形成後の浸蝕が盛んであったことがわかる。東方は伊那層よりなる丘陵となり、その一部が十万山として南側の駿馬沢に沿って西にのびてきている。丘陵地と段丘面の東西は1700m、南北の最大幅は550mを測り、台地の中間部はくびれで狭くなり、南北幅は220mとなる。このくびれ部の北東淹ノ沢の崖端浸蝕による深い谷によって切られた舌状台地に城本屋遺跡があり、くびれ部の東一城本屋より十万山西裾の東側は一段高位の扇状地を形成し、水田化している。十万山の西裾には帰牛原遺跡の十万山地区がある。くびれ部西の中央部はやや低地帯となって東西に走り、その先端部は崖頭浸蝕による深い谷となり、南原と中原に分かれている。南側は南原遺跡、北側は中原遺跡となっている。

この低地帯は淹ノ沢の崖端浸蝕進行前は、東方の丘陵地帯よりの湧水の流路をなしていたものと推定される。城本屋遺跡の発掘調査によって集落の南端の縄文中期後半末の住居址が淹ノ沢の氾濫によって切られていることが認められており、それ以後の流路の変化と思われる。帰牛原遺跡における集落は、この低地帯をはさんで展開されている。

帰牛原には城本屋・十万山地区・中原・南原と遺跡はあるが、同一段丘上に立地し、関連しあう遺跡であり、帰牛原遺跡群と総称することが妥当である。(第1図)

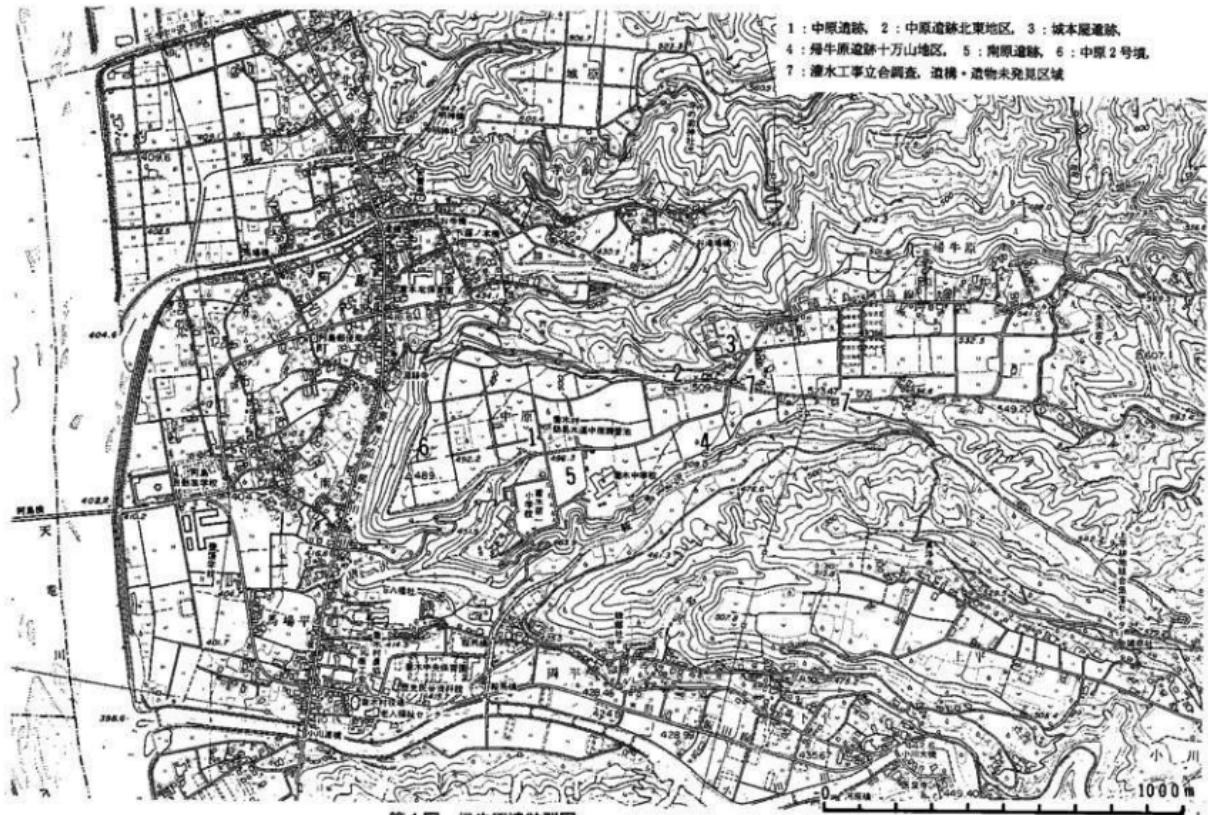
中原遺跡は、帰牛原段丘面では最も広く、南北幅は西端部が最も広く400m、東はくびれ部となって80mと狭くなり、東西幅900mの三角形状の面をなし、帰牛原中央部の東西方向の低地帯を境して南は南原となる。

中原遺跡はすでに数回にわたり調査が行われ、数か所に集落が発掘され、西端部には方形周溝墓群も検出されている。

今次調査した遺跡は、中原の北東端部にあり、北西の帰牛原段丘崖を阿島の町から県道大島阿島線にはいり、郭遺跡のある喬木北保育園、特別養護老人ホームの前をとおり、大きなカーブをなす坂道を登りつめたバス停のあるすぐ東側で、北は淹ノ沢の浸蝕崖となっておちている。

東西150m+南北約50m程のゆるい傾斜をなす畑と宅地となっており、標高505~508mを測る。

- 6 —
- 1 : 中原遺跡、2 : 中原遺跡北東地区、3 : 城本尾遺跡、
4 : 犀牛原遺跡十万山地区、5 : 南原遺跡、6 : 中原 2 号墳、
7 : 漢水工事立合調査、道構・道物未発見区域



第1図 犀牛原遺跡群図



1 : 犬牛原遺跡群 (1…中原, 2…中原北東地区, 3…城本屋, 4…十万山, 5…南原), 6 : 郡遺跡, 郭1・2号古墳,
7 : 郭5号墳, 8 : 阿島遺跡, 9 : 城原遺跡, 10 : 城原城跡, 11 : 松下城跡, 12 : 諸原十三塚, 13 : 上平遺跡,
14 : 里原水田址・遺跡群, 15 : 里原古墳群, 16 : 馬場平遺跡, 17 : 伊久間遺跡群, 18 : 伊久間畠下原遺跡

第2図 犬牛原遺跡群地形図及び周辺主要遺跡図

調査範囲は、道路北側バス停の東へ32m、南北幅は西で9m、東側で16mの400m²の限られた面積である。

2. 歴史的環境

帰牛原における調査は、1970年（昭和45）の1次調査から、1992年（平成4）の8次調査の今次調査をふくめて8回の調査が行われている。これらは後の項で述べることにする。

帰牛原台地の西端部に中原2号墳があり、径7m、高さ2mの墳丘が現存し、ここよりは埴輪片・直刀・須恵が出土している。この南に中原1号墳があったが消滅して、その跡はない。台地北側の段丘崖中腹に郭5号墳があり、道路改修工事中に朝顔形円筒埴輪、円筒埴輪の完形の出土をみて注目されているが、僅かに墳丘がその跡をとどめているにすぎない。

周辺の遺跡を概観すると、段丘北西崖下には竈東地域唯一の前方後円墳郭1号古墳があり、この南に消滅しているが窓2号墳よりは多くの馬具の出土をみている。これら古墳の東に接して郭遺跡があり、1992年特別養護老人ホーム建設に伴う発掘調査で、縄文中期後半から後期を主とした住居址17軒が検出され、その中の17号住居址よりは弥生前期竈賀川式土器の出土をみ、この期の住居址として下伊那地方最初のものとして注目された。

郭遺跡の北、加々須を隔てた北岸の沖積段丘面上には阿島遺跡があり、弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。同じ北の城原段丘上には弥生後期の遺跡があり古くから知られている。また知久氏の文城城原城跡がある。

帰牛原の南を境とする鞍馬沢を隔てた丘陵上には、松下城跡が西側にあり、また東側には諸原十三塚が発見されている。丘陵を下ると上平遺跡があり、広域農道調査で、縄文中期中葉・弥生後期住居址8軒、方形周溝墓1基、中世建物址2棟等が検出されている。

帰牛原西段丘崖下には、水田址が検出された里原遺跡、縄文前・中・後・晩期、弥生後期、古墳時代後期の遺物をみた馬場半遺跡がある。里原古墳群は6基の古墳があり、その首座とみる里原1号古墳は消滅しているが、四神四獸鏡・玉類・直刀・磁石の副葬品の出土をみている。

小川を隔てた南の段丘上の伊久間原遺跡は、有舌尖頭器の出土をみ、縄文早期～晩期、弥生中・後期、古墳時代前～後期等各期にわたる3大集落が検出され、平安時代・中世の造構もみられ、伊久間原遺跡群として知られている。（第2図）

II 調査経過

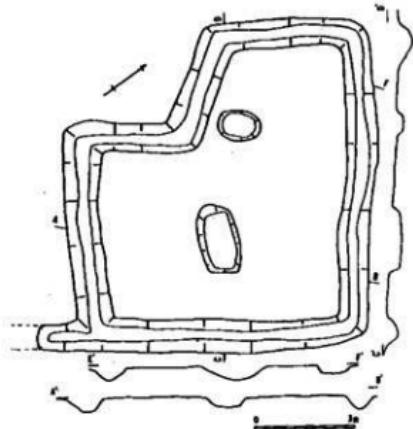
帰牛原遺跡の発掘調査・立合調査は、今次中原遺跡北東地区調査をふくめて、8次にわたって行われ、多くの成果がみられ注目されている。

（1） 帰牛原遺跡群の今次前の調査

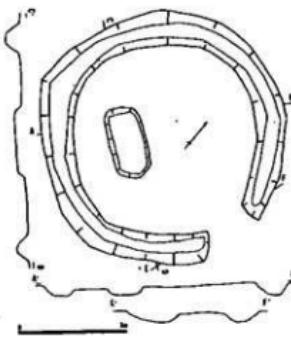
1. 第1次調査

昭和45年度（1970）農業構造改良事業の一環としての中原・南原に農道開設に伴う調査がなされた。（注1）南原十万山地区では縄文中期住居址2軒・弥生後期住居址1軒、また弥生中期寺所式土器を伴う土壤1基等が検出された。

中原地区では、方形・円形周溝墓各1基（第3図）が調査され注目された。



第3図 帰牛原I号 方形周溝墓



帰牛原II号 円形周溝墓

2. 第2次調査

昭和47年度（1973）喬木第一小学校が南原西端部に建設されることになり、用地内発掘調査で方形周溝墓5基（第4図）と、縄文晩期かとみる住居址1軒が調査された。（注2）

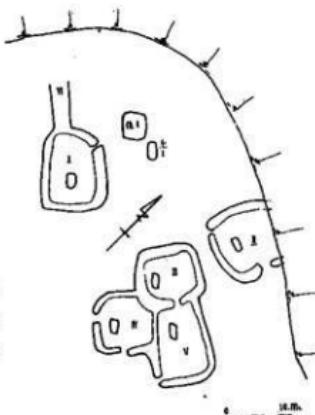
3. 第3次調査

昭和51年度（1976）農業構造改良事業が城本屋遺跡で行われることになり、これに伴う発掘調査が実施された。この結果、縄文中期後半Ⅲ期を中心とし、中期終末期等の住居址45軒、縄文後期3軒、弥生中期2軒、平安時代1軒の大集落が切りあい重複して検出された。（第5図）

北と東の用地外にかかる住居址がみられ、さらに集落のひろがりが予想された。（注3）

4. 第4次調査

昭和52年度（1977）十万山地区の農業構造改良事業に伴う発掘調査が行われ、縄文中期中葉未住居址8軒、弥生後期住居址5軒が検出された。（第6図）弥生後期9号住居址床面よりの銅鏡出土は注目されている。（注4）

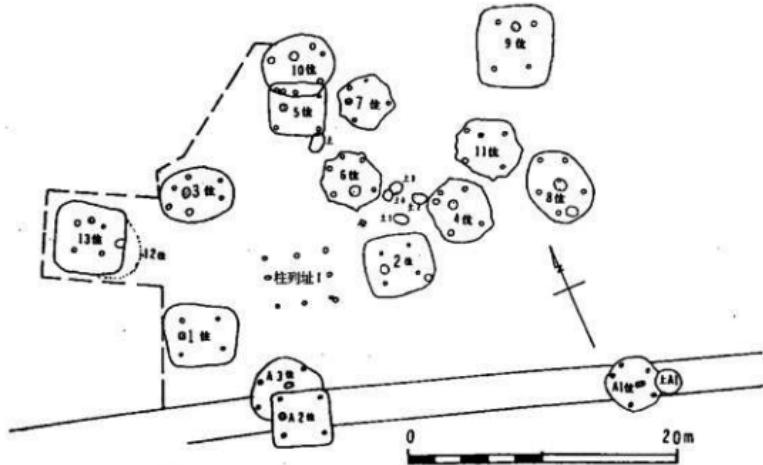


第4図 帰牛原南原方形周溝墓群

昭和54年度（1977）中原地区の一曲一一小学校よりの道路を北に中央部の低地帯を越えた東側に水道貯水タンク建設がきまり、調査が行われた。その結果、円形周溝墓1基・弥生後期住居址1軒が検出された。（注5）



第5図 帰牛原城本遺跡遺構図



第6図 烏牛原十万山地区遺構図

6. 第6次調査

昭和55年度（1980）小学校敷地内・中学校建設用地内・城本屋地域を除いた帰牛原西側畠地帯全域に灌水工事が行われ、それに伴う立合調査を実施した。その結果、以前調査分を含めて住居址148軒、——縄文時代では前期初頭とみる1・中期初頭14・中期中葉末19・中期後半55・後期14・晚期？1の104軒、弥生時代——中期2・後期38の40軒、古墳時代の住居址はなく、現存古墳1・消滅古墳の1基が段丘西先端部にある。平安時代1軒、中世3軒がある。土壙25基あり、縄文・弥生・中世がある。

方形・円形周溝墓は39基が検出され、段丘西側の中原と南原を区切る崖頭浸蝕のはじまるあたりから段丘端部に密集している。（注5）

7. 第7次調査

昭和56年度（1981）喬木中学校建設に伴う発掘調査が行われた。全面が桑畠であり、何回もの桑の改植による深耕により荒れが多くみられた。検出された住居址は9軒——縄文後期5・弥生後期1・中世3と土壙1基がある。遺構検出は深耕による荒れもみられ、遺物も散逸している状態であった。（注5）

以上、7次にわたる帰牛原西側段丘面の調査によって、時代的に集落の分布状態、墓域のあり方に対して問題が提示されたものと思われる。

注1：「帰牛原」1971. 3

注2：「帰牛原南原遺跡」1973. 3

注3：「帰牛原城本屋」1977. 3

注4：「帰牛原遺跡十万山地区」1979. 11

注5：「帰牛原遺跡群」1982. 3

以上、喬木村教育委員会発行

（II）今次調査（第8次調査）

平成4年度（1992）船牛原浄化センター施設が中原遺跡北東地区に建設することになり、これに伴う発掘調査が喬木村教育委員会によって実施することになった。

発掘調査日誌

9月2日（はれ・あつい）用地内東西方向にトレンチを設定。調査するが、干天続きで固く、作業進まず。表土は浅く、下はすぐにロームとなり、荒れがみられる。

9月3日（はれ・あつい）重機で表土を排除するが、大半は荒れており、地主によると、ここは全面壁土を採集したことである。

用地東隅は荒れておらず、重機の作業をやめ、調査にかかり遺構とみるが検出され、弥生土器片の出土を見る。

9月4日（はれ）1号住居址をはっきり検出、断面調査、掘り上げ、写真撮影、測量をなす。

東西方向のはば中央部、断丘崖に接して遺構とみるがあり、調査するが全面荒れており、遺構、遺物なし。

9月5・6日休み

9月7日（はれ・あつい）1号住居址の床面下に2号住居址の存在を検出調査。1号住とは方向がずれており、立替住居址とは、はっきりしなかった。写真撮影。

9月8日(はれ) 2号住居址測量。遺構分布測量をし、器材撤収。現場の調査を終わる。

その後、遺物の整理・実測・写真・図面の整理をしていたが、他の遺跡の調査・報告書作成等のため、平成6年になってようやく報告書の作成となった次第である。

III 調査結果

帰牛原中原遺跡北東地区で発掘調査した遺構は次のようである。(第7図)

住居址 2軒

弥生時代中期 1

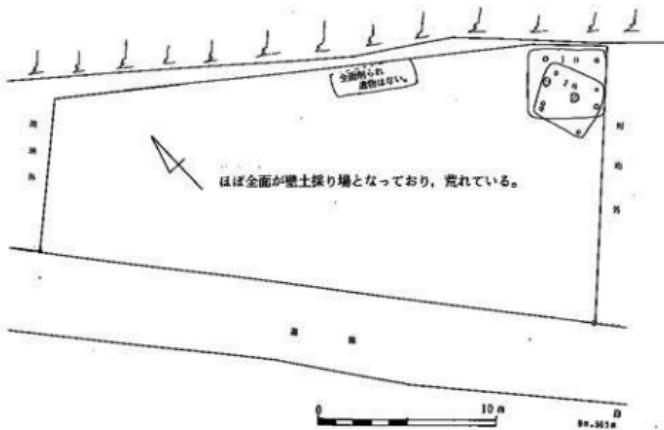
弥生時代後期 1

1. 住居址

中原遺跡北東地区1号住居址(第8図)

調査区の北東隅の用地境に接し、北は50cm程で段丘崖となる。南北3.9m×東西4.5mの隅丸方形をなし、主軸方向N48°Eを示す。覆土は、西側は壁土採集により削りとられているが、東側に残る断面によれば覆土は、上層は安定していないが、暗褐色土、または粘質の褐色土をなし、下層は粘質の濃い褐色土となり、床面は張り床となり堅い。主柱穴は4個、整った配置にあり、炉址は西側柱穴間の中間にあり、地床炉で西側に枕石1個を置く。焼土は著しい。

遺物(第10図)は少なく、土器は炉址内出土で二次的な火にあっており表面は荒れており小片のみである(10図1~7)。1は壺形の口縁部とみるが無文。赤褐色を呈し、小石粒を多く含む。壺形2の口縁部は、文様ははっきり残っていないが櫛描きによる横位短線文を頸部にめぐらすものとみられる。3のL口縁部も2と同じように文様ははっきりしないが櫛描き横位短線文が僅かにみられている。5には



第7図 帰牛原中原遺跡北東地区遺構分布図

斜行短線文がみられており、7は底部に付く部分片で二次的火により赤色を呈している。

土器は小片であり、文様を僅かにみるにすぎないが、彫形の口縁部の形態・口縁部にみる横位の櫛描き短線文等からみて弥生後期座光寺原式とみたい。

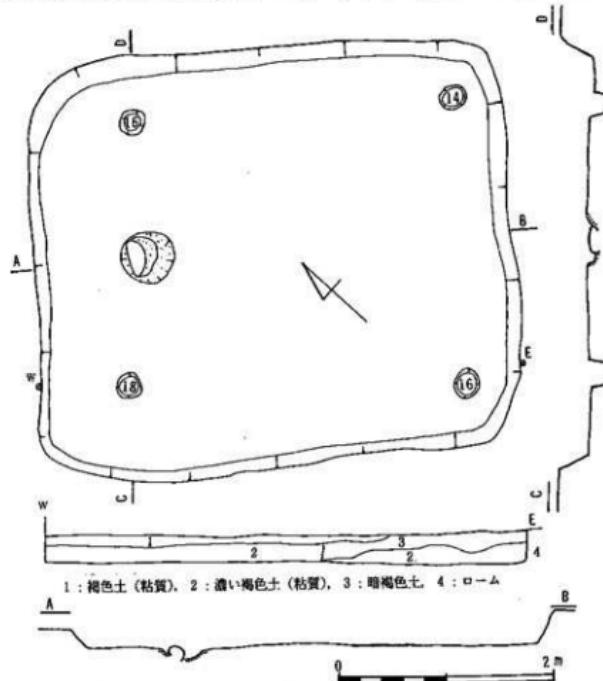
石器（10図8）の出土は、8の大形橢円形石器の1個のみで、覆土より出土であり、凝灰岩製重量280gである。

図示した9・10の石器は1号住居址東側の用地境よりの出土で、ともに刃部を欠く打製石斧で、本址に関連する石器とは思えない。形態よりみて縄文中・後期の石器とみる。

中原遺跡北東地区 2号住居址（第9図）

1号住居址の張り床の下に検出された。南北3.65m×東西3.15mの隅丸長方形をなし、南側壁は壁土採集によって削られ、壁高15cmを残していた。北東隅は用地外となり、壁を僅かに残しており、深さ30cmの掘りこみをなす竪穴住居址である。主軸方向はN 170° Eを示す。主柱穴は4個、整った配置にあり、炉址は中心よりやや南東によってあり、地床炉であり、焼土は著しい。炉址内に枕石ともみられる石1個が置られ、それに接して深さ15cmの穴が掘りこまれている。これについては後のものかはっきりしない。

遺物（第11図）は少なく、土器は11図1の1点のみで、炉址内出土である。淡褐色をなし、裏面には

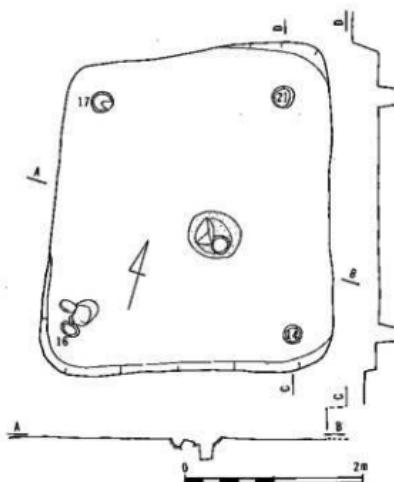


第8図 報牛原中原遺跡北東地区 1号住居址

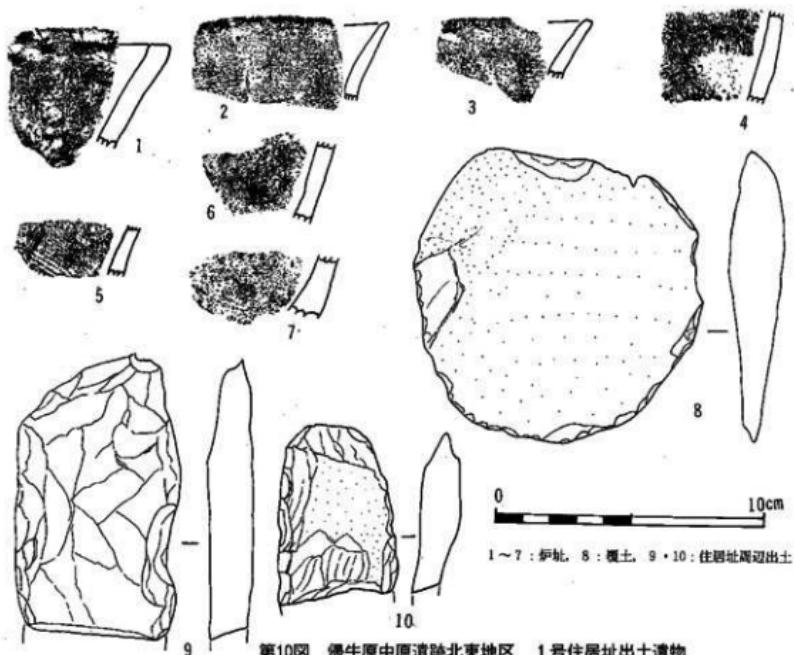
比較的大粒の小石を含んでおり、壺形の底部近くの破片である。

石器（第11図2・3）は柱穴に沿って出土し、2は大形の凹石で片磨岩製・重量1500g。3の石鍤は硬砂岩製。重量105gである。

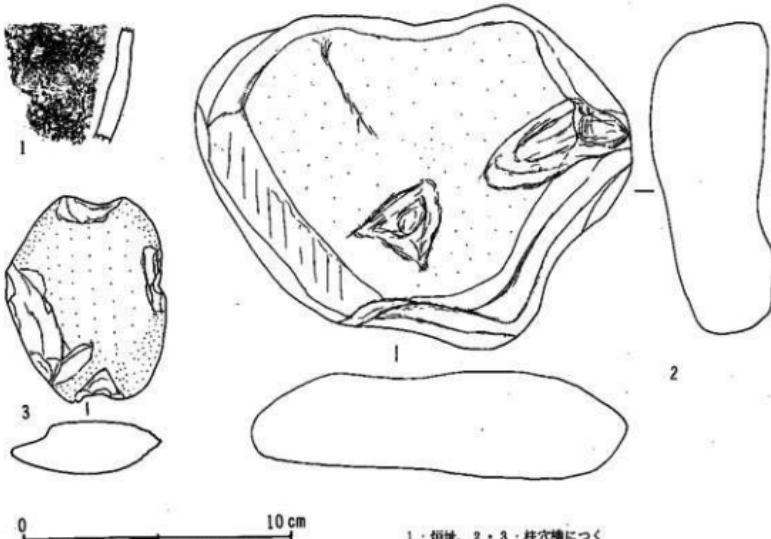
2号住居址出土土器は1片のみで時期を知るのには不十分である。弥生後期前半の座光寺原式の1号住居址の張り床下に検出され、また、炉址の位置が住居址の中心近くにあることよりみて、弥生中期後半の住居址とみた。



第9図 嵐牛原中原遺跡北東地区 2号住居址



第10図 烏牛原中原遺跡北東地区 1号住居址出土遺物



第11図 烏牛原中原遺跡北東地区 2号住居址出土遺物

IV ま と め

帰牛原中原遺跡北東地区の立地をみると、中原は帰牛原段丘面では最も広く、この北東地区は中原の北東端部にあり、北は滝ノ沢の浸蝕崖を竹林となって落ちている。南側は県道大島阿島線で切られた狭い範囲が調査区域であったが、県道を越えた南の住宅から東側の並ぶ住宅までに地形的にみて広がるとみる。さらに南は、中原と南原を分ける東西に続く低地帯の弥生時代からの水田地域となるが、小範囲の調査であり遺跡の広がりを知ることはできなかった。

今次調査は、段丘崖に接した400mの小範囲であり、大半がかって壁土採集場となって荒れていた。東用地境ぎわに荒れではなく、調査結果住居址2軒を検出した。1号住居址は2号住の上に張床をもつてのっていた。出土土器は炉址内上りの数点の破片のみで、二次的な火にあっており、器肌は荒れかすかに文様をみるもので、口縁部の横位の櫛引き短線文、頸部の斜行短線文、また壺形の口縁部の形態等からみて、弥生後期座光寺原式とみられ、この期の住居址とみたい。

2号住居址は、1号住居址の張床の下に検出され、やや小形の隅丸長方形の竪穴住居址であり、炉址は住居址の中心よりや南東に寄っており、地床炉である。出土土器は炉址内よりの壺形胴下部の1片のみであり、これで時期は決めかねるものであるが、炉址の位置と、上にのる1号住の弥生後期前半のものよりみて、弥生中期後半の住居址とみたい。

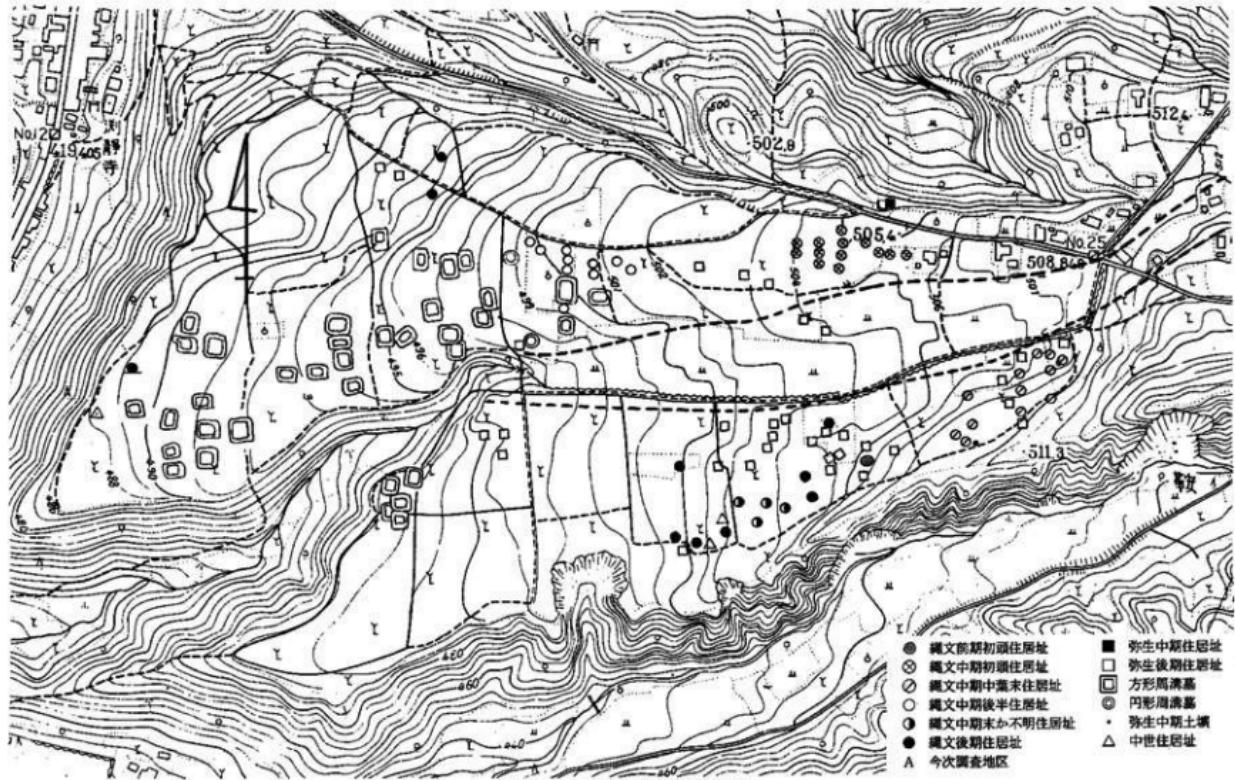
今次調査された住居址は2軒のみであるが地形的にみると、西側の壁土採集で荒れた大半の用地内は、住居址の存在したことは予想される。また、東の用地外に続く梅畠にも、弥生時代中期後半から後期前半期の集落が形成されているものと予想される。

帰牛原における調査は今次分を含めて8次にわたって行われた。これらは、帰牛原の中央くびれ部より西側を重点においてなされたものである。くびれ部東側は扇状地形をなし、中央部の水田地帯をはさんで、北と南側の道路に沿って現在の帰牛原の集落が並んでいる。この南側道路に沿ってくびれ部より東約500mの間の畑地に灌水工事がなされた立合調査では遺構・遺物の発見はなかった。また北側道路沿いの畑地よりの遺物採集も知られていない。また、帰牛原東端を通っている広域農道開設に伴う立合調査でも遺構・遺物は検出されなかった。くびれ部東側の大半を占める水田地帯の状況を知る以外には、その有無ははっきりしない。(第1図参照)

帰牛原中央くびれ部西の台地中央部を東西方向に低地帯が走り、南原と中原とに分けている。この低地帯の旧流路をはさんで、繩文時代中期から弥生時代後期後半を主体とした集落が展開している。(第12図)

この中央くびれ部北の滝ノ沢の崖端浸蝕により切られた北東の台地に城本屋遺跡があり、繩文中期後半住居址45軒の大集落の展開をみている。この中期後半の南側の住居址は、以後の氾濫によって切られ、泥と砂の堆積となっており、滝ノ沢の浸蝕の進行によって、くびれ部西の中央部を走る低地帯流路に変化をもたらしたものとみられる。

この流路変化の時期は明らかでないが、南原西部に検出された方形周溝墓群(第4図参照)のⅢ号周溝墓の北側は南原と中原を分ける谷頭浸蝕によって3分の1ほど切られており、これよりみると、弥生後期後に流路変化をきたしたものと思われる。



第12図 猿牛原遺跡群遺構分布図

この中央の東西流路が、その両岸に集落を形成した立地条件の主なる一つとみられる。

中央低地帯（山流路）の南北両側に沿う遺構をみると、

流路南側では東端に十万山地区があり、3次にわたる調査で、縄文中期中葉末から中期後半期の移行期を示す住居址11軒、弥生後期中島式住居址6軒が各期の集落を形成していた。また、弥生中期前半の寺所式土器の出土をみた土壤1基がある。この十万山地区西50mの間は遺構の検出ではなく、これより中学校用地内東側を含めた200mの間に、縄文中期後半かとみられるが出土土器は小片で磨滅しており不明住居址4軒、縄文後期7軒がある。弥生後期中島式住居址16軒があり、十万山地区6軒を合わせ22軒の集落となり、このうちの大形をなす住居址1軒より、6孔をもつ弥生時代の銅鑼の出土がみられ、集落の中心的な住居址とみられた。

この区域から縄文前期初頭の東海系の薄手の土器の出土をみた1軒の住居址があり、中世住居址3軒が検出された。

中学校用地内の西側大半は桑園改植の深い深耕に荒れ遺構、遺物は発見されなかった。

中学校の西に隣接する小学校用地内調査では、南側の大半は表土は浅く、すぐにローム層となり、遺物も発見されなかった。北側の谷頭浸蝕の谷に沿う地区に方形周溝墓5基が接しあって発見され、1基は3分の1余が谷の浸蝕によって切られていた。これより北東の小学校用地外の谷に沿う地点で弥生後期中島式住居址3軒が検出されている。

流路北側では、先に述べた城本屋遺跡は堀牛原段丘面の南西を深くえぐりこむ崖端浸蝕による滝ノ沢の深い谷によって切られた舌状の小台地に立地し、縄文中期後半Ⅲ期からIV・V期の中期終末期を主とした45軒、縄文後期3軒、弥生中期とみる2軒、平安時代1軒の計51軒の住居址が調査され、さらに用地外の北に広がるとみる大遺跡である。

城本屋のすぐ南の道を隔てた区域は灌水工事の立合調査では遺構・遺物はなく、滝ノ沢を隔てた南の水田地帯は、灌水工事はなく未調査である。

今次調査地区から約40m南の畠地帯西100mの間に縄文中期初頭かとみる土器片の出土をみた住居址12軒が検出され、その期の集落の存在がみられた。

この集落の南から西にかけて5軒の弥生後期住居址が散在して発見された。

中原段丘面のほぼ中央部に縄文中期後半Ⅱ期とみる土器の出土をみた11軒余の住居址よりなる集落が検出された。これより北西100mに縄文後期住居址2軒、弥生後期住居址2軒が検出されている。

中原中央部より西に寄って周溝墓群が密集し段丘西南西端部に向って拡がをなす。

周溝墓群は、方形周溝墓31基・円形周溝墓2基よりなり、出土遺物は少なく弥生後期後半の中島式土器の小片が僅かに主体部・周溝より出土している。周溝墓群の時期を南原・中原の弥生時代集落の主体をなしている中島式住居址と、周溝墓群出土土器よりみて弥生後期中島式期とみたい。

堀牛原遺跡群のあり方をみると、段丘中央部の東西山流路に沿って縄文中期初頭から続く集落が形成されている。

縄文時代中期の集落は、初頭が中原の東側に、中期中葉から後半期への移行期集落は十万山地区に、中

期後半Ⅱ期を主とする集落が中原中央部にあり、中期後半期から終末期の大集落が城本屋地区にと、その集落の場が変わっていた。

同時期の集落の分散がみられないことに、同一区域内に集落を形成する血縁共同体であったことが知られる。中期後半Ⅱ・Ⅲ期は伊那谷の繩文時代の最盛期であり、南原中央部への集落の拡散がみられている。

繩文後期になると城本屋では後期初頭の土器の中期終末期土器を伴出して出土がみられ、また土壤出土には前半の掘之内式の出土もみられており、中学校用地内東側から用地外東にかけての後期集落よりの出土土器は小片で僅かであるが、城本屋と同じ時期とみられ、中原段丘北西にみられた住居址も出土遺物は僅かであり、集落の分散の傾向がみられ、規模は小さくなり、遺物の減少も伊那谷段丘面にみられ一般的な傾向である。

弥生時代後期中島式の集落は南原東側に密集し、水便の良い段丘中央部の旧流路に面し展開している。中原には中央部東側に小集落が、また北西部段丘部近くの低位面に僅か2軒がみられたが、それより西は未調査区であり、その面に集落の広がりがみられるとも予想される。

弥生中期前半の寺所式土器の出土をみた十万川地区の土壤Ⅰ号があり、城本屋地区では用地外にかかり一部調査の阿島式土器の出土の住居址2軒がある。今次調査の中原北東地区では、用地内東端に中期後半とみる住居址と、その上に張り床である後期座光寺式住居址各1軒が検出されているが、その西側は前記のように壁土採集で造構は破壊されており、用地外東の畑地帯は地形的にみて、この期の集落の存在が予想される。

これら中期の集落については不明であり、帰牛原における弥生時代の中心は後期中島式期にある。

この期の生活域をみると、段丘中央部の旧流路区域は水田地帯をなし、これに面して南原十万地区は居住地域となり、旧流路を隔てた中原の中央部と、北西端近い低位面に小集落がある。南原中央部の南側の広い範囲にひろがる周溝墓群、小学校用地北の谷に面して5基の周溝墓群よりなる墓域がある。これらの外周の比較的干燥区域のみられる段丘平坦面は跡耕地帯となって広がり、農耕生活の基盤が築かれてきた状態を示すものと受けとめたい。

古墳時代になると、帰牛原段丘面の集落は発見されていない。段丘西端部に中原2号古墳が現存し、1号墳はその南にあったといわれているが消滅し、その跡はない。

古墳時代にはいると、帰牛原段丘崖下の里原地区を中心とした水田の開発は進み、里原遺跡では水田址が調査され、里原古墳群の首座とみる1号古墳の四神四獸鏡は注目され、弥生時代末から古墳時代の生产力の高まりがあり、ここに帰牛原弥生後期集落の移動の大きな力となった時代の動きを感じる。

喬木村誌によると、帰牛原には江戸初期には、南側に3軒、北側に4軒の小集落であったとあり、その後、17世紀湧水をためる堤ができ、18世紀に大きな堤ができ集落の発展をみ、明治時代になって加々須川よりの用水ができ現在の姿となっている。この時代の流れにいかに対処してきたかをみつめたい。

おわりに、今次調査は、中原遺跡の北東地区の一部であり、調査区域の大半は壁土採集地となり、破壊されていた。用地東端部に弥生後期前半と、その下に弥生中期後半とみる住居址2軒を検出したのみであっ

た。

しかし、昭和45年（1970）以後、平成4年（1992）の22年間に8次にわたる大小の発掘調査、また南原・中原の大半面に及ぶ畠灌水工事に伴う立合調査等により調査され、発見された遺構遺物は多く、これによって畠牛原遺跡群の集落構成の状態を知ることができた。

縄文時代中期山葉末から中期後半末にかけての十万山地区・城本屋地区の集落の構成、十万山地区を中心とした弥生後期後半集落の展開と生活基盤のあり方についての…端を知る手掛りをえた。

畠牛原西地域に広がる方形（円形）周溝墓群の存在は重視すべきであり、これらを中心にした畠牛原遺跡群の保存を期する対策を要望したい。

今次調査は、9月はじめの干天続きの $29.7^{\circ} \sim 34.1^{\circ}$ の炎暑の日を作業にあたられた方がたのご労苦と、地元の方がたのご協力を深謝したい。

（佐藤 駿信）

図 版



調査前の中原遺跡北東地区……道路左側が調査区域



発掘調査前の遺跡の状態



中原遺跡地東地区 1号住居址



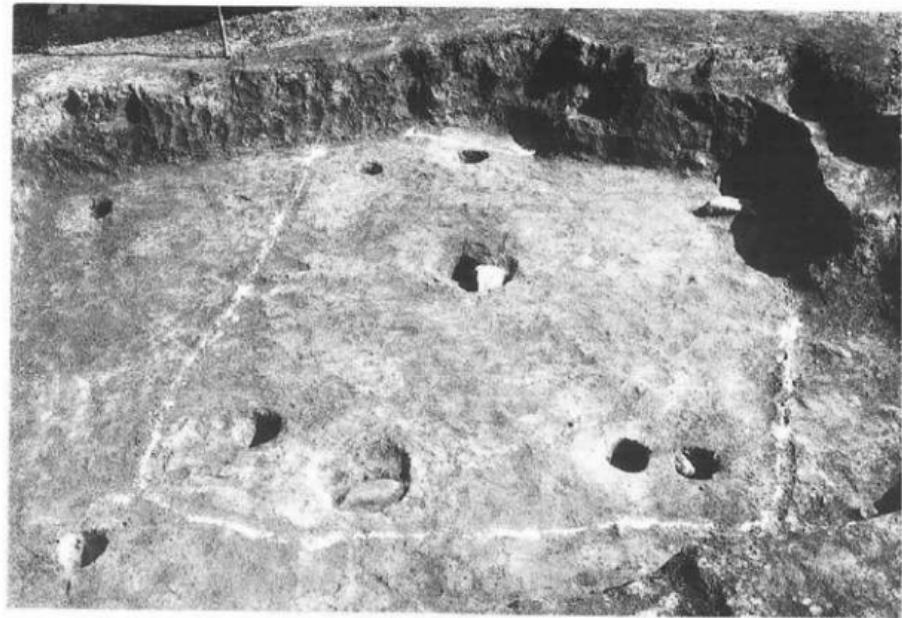
中原遺跡北東地区 1号住居址炉址



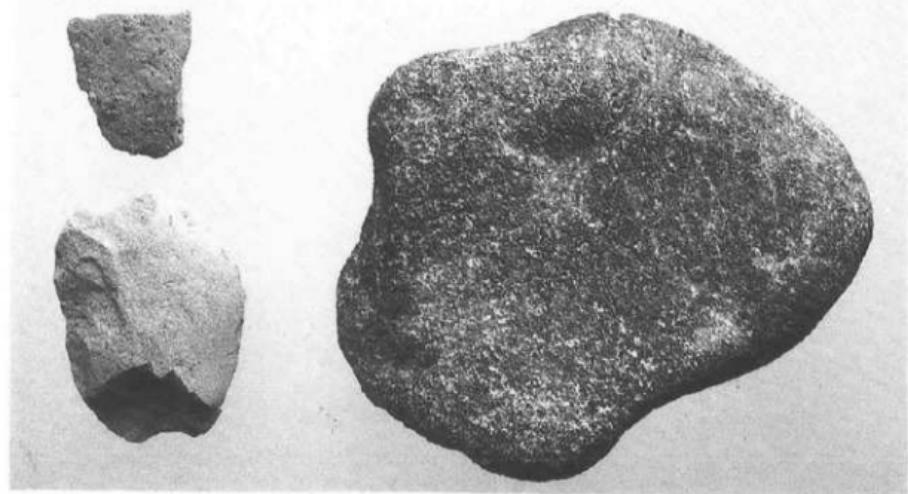
1号住居址炉址内出土土器片



1号住居址及び周辺出土石器（右……住居址覆土）（他は周辺出土）



中原遺跡北東地区 2号住居址……白線内が2号住
(1号住の柱穴・炉址が住居址内、外側にみられる。)



2号住居址出土遺物……左上：土器片、右：凹石、左下：石鍔



1号住居址の発掘調査



完成した猪牛原浄化センター



浄化センターを西より



浄化センターを
東よりみる



帰牛原段丘西端にある中原2号古墳

調査団組織

1. 帰牛原中原遺跡調査委員会

鈴川英人 喬木村教育委員会委員長
下岡重尊 喬木村教育長（前）
城下圭一 “（現）
桐生文雄 喬木村教育委員
東原美寅 “
小池吉朗 “
原五郎 喬木村文化財保護委員会委員長
黒川良一 喬木村歴史民俗資料館長

2. 調査団

団長 佐藤 駿信
調査員 牧内住子
調査補助員 松下真幸
“ 田口 さなゑ

3. 作業員

細田七郎 原 隆司 山田康夫 佐藤 いなえ

4. 事務局

柳沢治人（前） 市瀬武文（前） 原 俊文（前）
宮下喜挙（現） 吉川文人（現）

帰牛原中原遺跡北東地区

1994・7

下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 飯田市通り町 鮎秀文社
